

シンポジウム II
「共同大学院の学びからおりなす放射線看護学
——災害被ばく医療科学共同専攻修了生の
将来へのビジョン——」

**Radiological nursing learned from the disaster and
radiation exposure medical sciences master course:
The future vision of students who graduated the joint master degree**

新川 哲子¹ 堀内 輝子²

Tetsuko SHINKAWA¹ Teruko HORIUTI²

1 長崎大学大学院

2 福島県立医科大学大学院

1 Nagasaki University Graduate School

2 Fukushima Medical University

災害被ばく医療科学共同専攻修士課程は、長崎大学と福島医科大学との共同大学院として2016年に開講した。2018年3月に第1回生が修了している。修了生は、臨床・教育現場・行政機関の場で活躍している。本シンポジウムでは、修了生の大学院での学びと現在の活動についてご報告をいただき、放射線看護学の将来のビジョンについて考える機会となった。

山口拓允氏（環境省大臣官房環境保健部放射線健康管理担当参事官室）からは、「学びをつなぎ、行政機関の看護職者として放射線に向き合う」というテーマで、ご発表いただいた。環境省で放射線健康不安対策に従事しているが、福島県内の住民が未だ放射線に対する不安を抱えていること、さらに福島県外の住民の放射線に対する誤解が続いていることを話される。被ばく者に対する医療支援を行った永井博士の精神を受け継ぎ、今後も福島の復興支援に寄与したいと結ばれる。田中祐大氏（長崎大学病院）からは、「災害・被ばく医療科学共同専攻での学びから得たものそして今後への決意」というテーマで、話された。課題研究で放射線治療を受ける患者の家族の思いから、放射線の捉え方、イメージを明らかにした。その学びが臨床での活動にも活かしており、今後も放射線に関する知識を深め、放射線看護学分野における指導者として貢献したいと決意を述べられた。安井清孝氏（福島県立医科大学医療人育成・支援センター）からは、「原発事故後に福島市で生活してきた親子との対話から」というテーマでご発表いただいた。大学院で学びながら、課題研究において福島に居住している学童とその親の放射線不安について調査し、不安の傾向について結果が得られた。今後はさらに学童の放射線に関する認知について研究を深めたいと述べられた。小野寺悦子氏（宮城県登米市市民生活部）からは、「行政保健師として—災害・被ばく医療の学びからおりなす—」のテーマで話された。東日本大

震災後の体験と気づきは、保健師活動のあり方を問い直すきっかけになった。大学院での学びを深め、地域住民と協働して地域力を高める活動が災害抑止・軽減につながる復旧・復興期のリスクマネジメントとなることを意識し地域保健活動を実践できる人材の育成に取り組みたいと決意を述べられる。

被ばく医療に強い人材の育成は、本学会においても喫緊の課題である。急速に進歩している放射線医療の現場はもちろんであるが、原発災害、核テロ等の災害に備える為、放射線に関する専門的な知識を有する看護師の役割は重要である。今後も、修了生たちの活躍に期待し、多くの糸で織りなした放射線看護学の発展を期待したい。